
GO!GO!神さまチルドレン

HALCO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GO!GO!神さまチルドレン

【Nコード】

N0990N

【作者名】

HALCO

【あらすじ】

ごく平凡な女子高生、三瀬要人はある日突然ちよこつと不思議な能力を持つ、『神の子』になってしまう！ その日から、自称使用人が家に押し掛けてくるし、天狗が出てくるわ、変人揃いの神の子が訪ねてくるわで、もう大変。

そして神の子として、『人を幸せにする』という使命を与えられた要人は、日々仲間と奔走する毎日に。人と、少し不思議な生き物たちと、神の子達の少し切なくて、温かい毎日の物語。

チルドレン！

「走れ走れ！ 逃げられるぞ！」

うだるような暑さの夏の日、彼らは全力でアスファルトの上を疾走していた。彼らの追う先には、人の顔をした三毛猫。

頭上には甲羅に森を生やした巨大な海亀が、悠々と高い空を泳ぎ、彼らを見下ろしていた。

「あの化け猫が本当に依頼者なんだろうな」

「うんうん。バッチリ」

「じゃあなんで、全力で逃げられてるんだよ！」

集団の先頭を逃げる四足歩行を睨みながら、彼らの先頭を走るイカツイ風貌の男が叫んだ。

「ごちゃごちゃ言わないで捕まえる！」

朱色のママチャリを漕ぐポニーテールの少女は、バテ気味の仲間たちをにやにや笑いながら、激を飛ばす。

「お前が行けよ、自転車だろ」

「あんなちっちゃいの自転車じゃ無理無理。捕まえられないって」
二番目に走る明らかに体力のなさそうな、マッシュルームヘアの少年が、息を切らしながら愚痴るが、少女は手のひらをひらひらと振りながら、軽く笑った。

「だあー！ もうめんどくせー。おいカナメ、あの猫説得しろよ！」
マッシュルームヘアと並んで走る真っ黒に日焼けした坊主頭の少年は、ママチャリの荷台に乗車している背の低い少女に向かって叫んだ。

「おっけー。じゃあみんなも一緒に言おう」
走る男共から文句が漏れるが、少女は一向に構うことなく、せーのと言って皆もそれに続いた。

「私たちがあなたをオタスケします！ だから逃げないで！」

性別も、性格も、外見も、バラバラの五人の少年と少女たち。

人間、化け物問わず幸せにするのが、彼らの使命だ。

そのためなら、例えば火の中水の中。猛暑の中の全力疾走だって厭わない。

そんな彼ら『ハッピー研究クラブ』略してハピ研と、神の子の物語はこの暑い季節のほんの少し前から始まった。

The first happiness 1

朝。線香の匂いが染みついた部屋に、薄い色の陽が差し込んでい
る。

少女は一人、棚の上にある写真立てを前に、手を合わせていた。
ずいぶんと長い時間手を合わせていたが、火をかけていたヤカンが、
甲高い声で鳴き出し、少女はようやく腰を上げた。
「行ってきます」

ごく平凡などこにでもある朝の挨拶を、ここにはいない誰に向か
って小さく呟き、少女は笑顔の母親の写真に背を向け、狭い和室の
部屋から出て行く。

静かな朝と、どこにでもある日常の空気に包まれた今日が、その
瞬間までは、確かにそこにはあった。

1

今日の気温は25度。夏の始まりと、春の残り香も消える季節で
ある5月の下旬の今らしく、ずいぶんと過ごしやすい気温である。

それに加えて町の高台にある学校に続く、この道に沿うように吹
く風が頬を撫で、とても心地が良い。学校へと登校途中のこの時間
が、三瀬^{みせかなめ}要人にとって一番好きな時間だった。

要人は同性と比べても背が低く、折角の高校の制服も、化粧つ気
のない幼い顔や、肩の上で切り揃えただけの髪。それにまな板のよ
うな胸のせいで、同年代の女子と比べて、あまり華になっていない。
思春期である要人も、もう半ば諦めているのか、せいぜい童顔を
隠すためにダサイ黒ぶちの大きな眼鏡をかけているのが、唯一の対
策だった。

そんな彼女が通う公立桃城高等学校は自宅から徒歩1時間弱かか
るが、このような幸せな時間が過ごせるなら、毎日徒歩通学しても

構わない。と彼女は半ば本気で考えていた。

「要人！」

ボリウム最大の大きな声が、後方から聞こえてきて、しかもそれが自分の名前を呼んでいるので、要人は慌てて後ろを振り向いた。そこには、要人と同じ紺色のセーラー服を着て、朱色のママチャリを全身を使って漕いで、上り坂とは思えない速度で、要人を猛追してくる少女がいた。少女は要人の横に自転車を止めると、颯爽と下車して要人に、無邪気な笑みを向ける。

「おっはよう！」

ビシッと手を上げ挨拶する少女、要人のクラスメイトで友達の百田由美は、いつも通り元気に満ち満ちている。

由美は要人が高校で出来た初めての友達で、高い身長と高いテンション。そして少々弱い頭を補って余りある運動能力を持つ少女だ。由美の朝っぱらかのテンションについていけない要人は、苦笑いをして返事するに留まった。

「おはよう由美。今日も元気だね」

「まあね。ところでなんで今日、自転車じゃないの」

「実は昨日パンクしちゃってさ、家から歩いてきた」

「ええ！ 要人の家って峠田町でしょ、めっちゃ遠いじゃん」

並んで歩き出しながら、由美は要人の発言に大げさに驚いてみせて、根性あるなあと続けた。

要人はそんなことない、バス使うお金がもったいないだけだよ。と笑って見せる。それは謙遜でも遠慮でもなく、紛れもない事実だった。

「あれ、三瀬と百田じゃん」

今度は、野太い声が前方から聞こえてきて、エナメルのおもちゃを持った坊主頭の少年が二人、下から歩いてくる二人を見下ろしていた。

背の高い坊主頭の方が、近藤史也。その隣にいる、小さなニキビ顔の少年は青山英輔で、二人も要人や由美と同じ1年4組のクラス

メイトだ。

普段滅多に登校中は顔を会わせることない二人が、自分たちより前にいることに、妙な違和感を感じた要人は、恐る恐る由美に尋ねた。

「由美ちゃん、今時間わかる？」

「お前ら急げ！ あと5分で門締まるぞ」

由美がケータイを、取りだす前に響いた近藤の声に、二人は一瞬固まってすかさず辺りを見回す。お喋りしている間は、全く気付かなかったのだが、周りの生徒たちはみんな駆け足になって、ひたすら丘の上にある学校の門を目指していた。

遅刻をすると罰則として、学校の外周を走らされ更に、漢文をひたすらノートに写す作業が待っている。校長いわく「文武両道の我が校に相応しい罰」らしいが、やらされる方は堪ったものではない。由美と要人は顔を見合わせることもなく、どちらからというわけでもなく、全力で走り始めた。

その途中、みんなが駆け足の中、たった一人ポツリと歩いている少女の姿を見つけ、要人は一瞬足を止め、横を走る由美に声をかける。

「ごめん、ちょっと先に行つて」

由美の返事を聞くまでもなく、道から逸れ要人はその少女に向かっていった。

道の反対側、崖側のガードレールぎりぎりにいる少女は、三つ編みをして、俯き加減に歩いている。酷く地味で、みんなが慌ただしく動いているこの場では、存在感が薄いのだが要人は少女の肩をしっかりと掴んだ。

「アズサちゃん、急いだ方がいいよ。もう登校時間ぎりぎりだよ」

酒井梓紗さかいあずさは、小・中・高と要人と同じ学校で幼馴染だ。特段お互いが親しいというわけでもないのだが、それでも彼女は要人にとって放ってはおけない人物だった。

「あ、うん。でも私運動出来ないし、多分間に合わない。もう諦め

たから、先に行つて」

一言一言噛みしめるように、ゆっくり喋る梓紗に要人は少し肩を落としたが、じゃあ。と言つて数歩歩くが、突然振り返つて梓紗を見る。

梓紗も、立ち止つて要人の顔を見上げる。

「言い忘れてた。おはよう、梓紗ちゃん」

「お、おはよう」

「じゃあまた教室で」

手のひらをひらひらと振りながら、駆けていく要人の姿を梓紗は立ち止つたまま、じつと視線を送り続けていた。そして、最後尾になり周りに誰もいなくなつて、ようやく一步目を踏み出した。

朝の全力疾走から半日が過ぎ、夕焼け色に染まつた教室で、要人はぐつたりと机の上で伸びていた。

終業の予令が鳴つてから、30分近く経っている教室にはもう要人の他には、数人程度しかいない。いつもなら、要人も他の人と同じように、もう帰宅の途についているはずだ。

しかし朝に無駄な体力を削ってしまった分、これから長い距離を歩くのが非常に億劫で、こうして一人であらだらとしているのだ。

重い上半身をだるそうに持ち上げ、要人は前を向いた。

窓際が一番後ろという、皆が羨む絶好の席からは、教室の全景が見て取れる。濃い影と窓から差し込む夕陽。グラウンドから聞こえる声は、やけに遠く、本当に同じ世界にいる人々の声なのかと、疑いたくなるくらいだ。

そのまま数分、もしくは数十分、黙つてぼんやりとしていた要人だったが、ようやく足を引きずるように、教室から出て帰路に着いた。

これで一日が終わる。

重い鞆を肩にかけ、漠然とそう考えていた。

結局一時間近く歩き、自宅に着いた。オンボロアパートのトキワ荘の2階の角部屋で、赤いペンキの剥げかけた、鉄の階段を上つてすぐに、その部屋はあった。

ポケットから取り出したお下がりのキーケースから、部屋のカギを取り出し鍵穴に差し込む。ドアの軋む音と共に、目の前に暗い闇が現れる。

誰もいない部屋。一日の終わりを告げる瞬間。暗い部屋に足を踏み込んで、要人はゆっくりと暗闇に身を預ける……はずだった。しかし、数歩踏み入れてから、部屋の中の静寂がいつもと違うことに気がついた。

いつも要人を迎え入れてくれるはずの暗闇は、何か囁きながら僅かに、緊張しているようにも思える。なぜ彼らがいつもと違うのか。その答えはすぐに気づく。

誰か、いる。

簾の向こう。この中で大半を過ごす居間に、それはいた。

逃げるか。半歩後ろに下がって、再び固まった。影の中にある影が、動いた気配が確かにしたからだ。暗闇のざわめきがうるさくなる。中には叫び出すものまでいるようだ。

当たり前だ。あんなに音を立ててドアを開けたのだ。気づかないわけがないだろう。

そう考えながらも、要人は固まったまま動けないでいた。半開きのドアから差し込む月明かりと、部屋の暗がりとの境界線を、ひたすらに凝視して祈ることも忘れて、ただひたすらに事態の傍観に必死になった。

そのうち、ぎしぎしと短い廊下を歩く音が聞こえ、何者かがゆっくりと、やけに落ち着いた足取りでこちらに近づいてくる。

要人は悲鳴を上げること、唾を飲むことさえ出来ない。

そして月明かりと暗闇の境界に、彼が現れた。

運命なんて、安っぽい言葉以上の土産を持って、真っ黒いスーツを着込んだ男は、顔を強張らせている要人に向かい、にこりと柔和

な笑みを浮かべ、一礼する。

「こんばんわ。要人お坊っちゃん、お迎えに上がりました」
全ての始まりは、あまりにも唐突なものだった。

The first happiness 2

こいつは誰だ。

そもそもお坊っちゃまって何だ。最近漫画やドラマでも中々聞かない言葉だ。

というかそもそも、なんで自分の名前を知っているのだ。

ずれたメガネをかけ直しながら、そのフレーズを何度も何度も要人は繰り返した。

しかしながら当然、答えなど出るわけもなく、要人はただ固まって立ち尽くすことしかできない。

男は滑るような仕草で一礼すると、まじまじと要人を見つめる。

「おや、女性でしたか。名前からてつきり男性かと思っていましたが……しかしまあ、失礼はなさそうでよかった」

容姿をじろじろと見られた後、何か物凄く失礼なことをさらりと言われた気がして、要人は一瞬たじろぐ。

確かに化粧もしていないし、ビン底眼鏡をかけているから、女の魅力というのは皆無かもしれない。ということは、要人も気づいていないわけではないのだが、それでも彼と自分は初対面だ。本人を目の前をして、普通そんなこと失礼なこと言わないだろう。

呆けた表情を、何とか直して要人は精一杯、男を睨みつけた。

「そんなこと言ったら、警察呼ぶよ。はやく出てって」

我ながらマヌケだな。と考えながら、要人は声を上げる。不法侵入して、わざわざ自分を待っていた奴が、脅したところでのこのこと帰るわけない。

男も全く同じことを考えたのだろう。

明らかに大げさなため息を吐き、ご丁寧にお手上げのポーズまでしてくれて、心情をわかりやすく表現してきた。

「とにかくお入り下さい。お茶をお入れしましょう」

「いやいや、おかしいでしょ」

まるで我が家に客人を招くような物言いをし、くるりとこちらに背を向けて、再び暗闇の中に消えようとする男に、思わず一歩近づきながら、要人はツツコミを入れる。

「なんで見ず知らずの空き巣なんかに、お茶入れてもらわないといけないのよ」

要人としては、しごく当たり前のことを言っただけなのだが、どうやら言われた本人は、相当心外だったのだろう。整った顔立ちの男は、あからさまに嫌そうな顔をして、要人を見下ろした。

「空き巣？ まさか。こんな家に盗むものなんてないでしょう」

確かに金目のものなんて家中ひっくり返したって、出てきやしない。だからって、さすがに言いすぎじゃないだろうか。

少なからずショックを受けている要人には目もくれず、男はさつさと部屋の奥の暗がり、姿を消していった。

「なんなの、もう」

「知りたければ、ついてきてください」

「わかったわよ。行けばいいんしょ、行けば」

愚痴った要人に暗闇の中から、男の澄ました声が聞こえてきて、要人はもう自棄になり、靴を乱暴に脱ぎ捨て、自らも男のいる闇の中に飛び込んで行った。

部屋に入り、電気を付けて驚いたことが幾つかあった。

まず一つ目は、部屋の中が驚くほど綺麗になっていること。

元々要人は掃除が嫌いじゃないし、部屋も清潔を保ってはいたのだが、恐ろしいほど年季が立っているこのトキワ荘の埃や汚れは、そう簡単に拭えるものではない。

どれだけ擦っても、柱に染みついている汚れは取れず、またあつという間に埃が降り積もる。

数年間住むうちに、ある程度妥協しないと自分と、彼らとの共存

共栄は達成できない。と悟った要人は、絶対に落ちないシミなどには手を出さずにいたのだが、今日に入った部屋にその面影はない。

七畳の畳も張り替えたように綺麗になり、埃も汚れも部屋の中には存在しない。こんな部屋、トキワ荘ではきつとここだけだろう。

「あなたがやったの、これ」

「ええ、なかなか掃除のやりがいのあるお部屋でした。お嬢様は腰かけてお待ちください。お茶を入れて参ります」

につこりと笑う男の言われるがまま、放心状態でその場にペタンと、要人は座り込んだ。今の状態は、ある意味男と居合わせたことよりもシヨックだった。

まさか、いかなる掃除用品をも跳ねのけた頑固な汚れを、取り除くなんて。要人は信じられなかった。

そうしてようやく、男に対する興味が要人の中に芽生えた。

数分後、美しい花柄のセットのティーカップと、ポットを持ってきた男に促されるがまま、要人は席についた。

だがどうにもお茶なんか飲む気にはなれなくて、睨むように男を見つめる要人に、男はあくまで物腰柔らかく、要人の対面に座り微笑んだ。

「どうぞ、毒なんか入っておりませんので。殺すなら、もうとつくにやっていますよ」

それもそうだと、しばらく薄い赤色の紅茶に映る自分の顔を眺めた後、要人はティーカップを持ちお茶を一口すすった。

「……おいしい」

目をしばたかせ、要人は呟いた。男は満足そうにほほ笑む。初めてあった時から何となく思っではいたのだが、この男かなりの美形だ。高い鼻や、要人よりも白い肌に、血色の良く形の良い唇頭の後ろで括った髪も艶やかで、なんだか嫌味なくらいの顔の整いぶりにどこか、人間離れた印象を受ける。

「あなたは『なに』？」

何回も思った言葉、言った言葉。けれど、今の一言ほど気持ちの籠った言葉などなかった。

皺の一つもないスーツを着ていて、一つ一つの動作にも無駄がなく、何よりもこんなにおいしい紅茶を淹れる男が、ただの泥棒だなんて、ありえない。とようやく要人も確信したのだ。

「私のことはグラフとお呼び下さい。要人お嬢様」

「それで、なんでこんなところで、私の家に来て私にお茶を奢ってるの。グラフさん」

「呼び捨てで構いませんよ。何故と言われましても、使用人が主人にお付きするのは当たり前でございます」

「使用人ってあなたのこと」

はい。とグラフは頷く。

「じゃあ主人っていうのは、私のこと」

はい。とグラフは先ほどと同じように頷いた。要人は言葉を失い同時に、口に含んだ紅茶を吹きそうになった。

「あの、私使用人なんて雇った覚えはないんですけど。必要もないし、お金もないし」

「金銭を頂くなんてご無礼な真似わたくしは致しません。あなたに奉仕することが、私の先代との約束であり、私の至福ですので。それに、私の奉仕はすぐにお嬢様のお役に立つと思いますよ」

自信たっぷり言い切ったグラフに、要人はただただ戸惑うだけだ。

「あなたは先日、1034人めの神の子に認定されました。よって規則に従い、お亡くなりになった先代に付いていた使用人の私が、あなたにお仕えいたします」

数秒後、グラフの言葉の意味を理解した要人は、返事をする前に盛大に紅茶を噴き出していた。

この世界、人間は平等ではない。

それは生まれてきた国や環境や待遇や親や経済状況など、目に見

える部分でもたくさんあるが、もつと顕著な例がある。

神の子。

そう呼ばれる世界中にいる人々のことだ。彼らは特異な能力を持ち、キリストともイスラムとも、この地上に存在する全ての神とも違う「神さま」に啓示を受けた人間。人では得ることの出来ない能力を持ち、国や地域から保護され、その他の人々からはかけ離れた待遇を受けるといふ。

日本でも、多方面の市場に進出し莫大な利益を得ているOYAMAグループなどの会長など、有名な神の子はみな大金持ちで特別な地位にある。

そんな神の子が自分だっていきなり言われたって、信じられないというよりも、とりあえず笑うしかない。

紅茶を嘔き出したあとせき込む要人に、音もなく近づいたグラフは、ポケットから出した白いハンカチで、要人の口元を拭う。

要人は赤面し、変な声を上げながら座ったまま後退し、壁に張り付いた。

「まだ付いておられますよ」

「じ、自分で出来ますから！　だ、大丈夫です」

ぜいぜいと息を切らし、なんとか言いきった要人に、グラフはため息を一つ吐く。

「あ、あと、あなたの勘違いだと思います。私が神の子っての」

「根拠はおありですか」

「い、いやないですけど、有り得ないじゃないですか。私、ただの女子高生ですよ。神の子ってなんか不思議な力使える特別な人ですよ。私何にも出来ないし」

グラフは黙って要人に近づき、要人はまた短い悲鳴を上げた。

要人の悲鳴を無視し、失礼します。と断り、要人の右腕を持ち、裾を肩辺りまで捲く。そして、右肩を指さした。

「これをご覧ください」

言われるがまま、要人はグラフの差している場所を見る。肩の外

側から背中に向け、青く光る文字が何か綴られている。英語でも日本語でもない、全くの見覚えのない自らの体に羅列された文字に、要人は唾を飲み込んだ。

「これが『啓示』です。おわかり頂けましたか、あなたが幾ら拒絶しようとも、あなたはもう神の子なのです」

要人はもう何も考えられなかった。

ただ、今まで気づきあげてきた生活も、送ってきた日々も、どこか遠くで崩れ去る音が聞こえた。

The first happiness 3

朝。静かな朝。

しかし、そこにはもう昨日までの朝はない。

「おはようございます。お嬢様、朝食の用意は出来ております。準備が出来てからどうぞお食べ下さい」

側に控える自称使用人。グラフとかいう名前の、得体の知れない男が持ってきた真実は、一晩では語りきれぬものだった。

ぼさぼさの髪の毛を触りながら起床した要人は、ものすごい違和感を肌で感じながら、洗面台へと向かう。

酷い表情の自分を嫌というほど鏡で眺める。頭から水を被り、ドライヤーで髪を乾かした後、居間に戻るとグラフがほほ笑みを浮かべ、ちょうど朝食を並べきったところだった。

綺麗に並べられたパンやスープ。食器は恐らくグラフ持参のものだろう、どれも朝日を反射し輝いていて、きつと皿一枚で要人の持ち物全て買い取ってしまうほどの、価値のあるものだろう。グラフ本人にも確認は取っていないし、取りたくもないのだが。

席に座った要人にグラフは静かに近づき、一枚の紙を渡す。

「お嬢様、こちらがリストになっています」

要人はリストを無言で手に持つ。そこには様々な名前の人物と住所が、無造作に羅列されている。

「これが昨日言っていた『善行リスト』ってやつ？」

はい。とグラフは短く返事をした。

神の子というものは、ただでさえ一般人が知りえる知識は少ない。それに加えてテレビも新聞もちろんパソコンもない要人にとって、完全に好奇心のカヤの外だった。

昨日グラフに教えてもらった知識は全て眉つばもので、その中でも衝撃だったのが「神の子は無償で地位を与えられているのではない」ということだ。

神の子の存在意義は生命の為に、最善の行いをするこららしい。つまりは困っている人を助けることが、神の子の一番の仕事なのだ。この行いにより、神の子の中でも神に愛される程度が変わる。この程度は、常に肩から背中綴られている文字によって示され、良いことをすれば「神の子の中で何番目に神に愛されているか」がわかるらしいのだ。全ての神の子は、このランクを上げるために日々善行に励んでいるらしい。

そして今パンを片手に眺めているこのリストが、この周辺で困っている人々らしいのだ。

「でもおかしいことだね。神さまって、みんな平等に愛してるもんじゃないの。それに何となく、強要されるって感じでやだな。やらされるものじゃないでしょ、良いことって」

パンを飲み込んだ後、要人は側に控えているグラフを見る。

「神様は、あなたの思う神とは別のものです。ただ、確実に存在する神ですが。それにお嬢様の存在義は、神の子になった瞬間から決まったのですから、深くは考えない方がいいかと」

「ふーん。なんだかな、それよりもグラフはご飯食べないの」

「私は、後で食べますので」

そっか。と少し残念そうに呟いて、要人は残った朝食を一気に食べきった。立ち上がりながら、食器を片付けようとすると、隣からグラフの手が伸びて、先に食器を手にとってしまった。

「お嬢様は、気を使わなくて大丈夫です。私が片付けますので」

「そ、そう。ありがとう」

気まづい空気を感じながら、要人は立ち上がり再び洗面所に向かう。

顔を洗い、歯を磨いてから眼鏡を掛け、要人は居間に戻った。グラフはベランダにある洗濯機で、ちょうど洗濯物を放り込んでいるとこだ。

朝陽を受ける場違いな格好のグラフと、ひどく懐かしい光景から目を離せないでいると、グラフがベランダから出てきて、要人に声を駆けた。

「お嬢様、お出かけですか。随分とお早いですが」

「う、うん。自転車壊れてるし、昨日も遅刻しかけたから、早めに学校行かないと」

「あああの自転車ですか。でしたらもう昨晚お嬢様をお待ちしている間に、直しましたよ」

「え、マジ。というかなんで私の自転車壊れてるって知ってたの」

「マジです。お嬢様のことならなんでも知ってますよ」

にこりとほほ笑むグラフに、それは軽く犯罪含んでますよ。と伝えたい衝動を飲み込み、要人は踵を返した。

「あ、ありがとうございます。でもまあ、今日は早めに出るよ」

そう言った後、部屋の隅にある母の写真の前に座り、手を合わせる。そして、行ってきます。と言い、要人は居間から出ようとした。その時、後ろから酷く懐かしい言葉が、要人に届く。

「行つてらっしゃいませ。お嬢様」

「うん。行つてきます」

その時、要人の胸にいつぱいになった感情の名前を、彼女は知る由もなかった。

昼休み。賑やかな教室内で、弁当を開けた要人は朝からずっと気に止めていた件を、目の前で同じく弁当にがついている友達の百田由美に尋ねた。

「由美さ、山野勉君って会ったことある？」

「山野勉ってあそこの席の」

箸で前方の席を指して、由美はもごもごと唸った。

「いやあ見たことないな。確か、学校に一回もきたことないんじゃないかな。どうして今さらそんなこと聞くの？」

教卓のすぐ前の最前列の席が山野勉の席だ。由美の言うとおり、

要人も山野勉の姿を一度もみていない。もう入学して、一カ月を過ぎているにも関わらずだ。

彼の名前を思い出すことも、ましてや彼のことを気に留めることもなく日々を過ごしてきた。そして今後も、そのまま彼の存在を思い出すこともなく卒業していただろう。

だが今朝、グラフに渡された『リスト』のおかげで、要人にとって山野勉という人物は、とても大きな存在となっていた。

「いや、ちよつと気になっただけ」

笑ってごまかしたが、実際は「ちよつと」じゃない。好奇心とただの興味とも違う、これまで感じたことない山野勉に対する衝動が、要人の中で膨らみ続けている。

そんな要人の様子に気づいてか、由美は要人の嘘にふーんと返事をした後、背もたれに寄りかかり後ろの席で飯を食べている男子連中に声をかけた。

「近藤。山野勉について何か知ってる？」

「山野つてウチのクラスの山野か。俺は知らないな会ったことないし。お前ら知ってる？」

近藤史也は要人の二倍はある巨大な弁当を頬張っていた。若干眉をしかめながら、ご飯粒のついた箸をちよいちよいと横に振る。

近藤の言葉に続いて、ほとんどの男子は知らねえ。と言ったり首を横に振っていたが、その中の一人から唯一、有益な情報が飛び出してきた。

「山野つて俺と同じ中学出身だぜ。確かめちゃめちゃ怖い顔してて、目つきがヤバいし、眉もほとんどなくてさ。実際かなりの問題児だったぜ」

由美と要人だけでなく、意外な発言に男子連中もどよめく。

「でもなんで山野のことなんて聞くんだ。あいつ絶対学校来ないだろ」

近藤がしごく真つ当な質問を投げかけてきて、要人は何とか言い訳しようと口を開くが、声を発する前に、にやにやと笑う由美が先にその質問に答えてしまった。

「要人が気になるんだってさ、山野のこと」

由美の答えに、要人を含めてその場にいた全員が固まってしまい、誰が食べていたかわからないウインナーが、床に転がった。

「由美その言い方は誤解を招く……」

「三瀬さん、あいつはやめとけ」

「まじかよ三瀬！　山野とどこであつたんだ」

一斉に喋り出した皆の反応に、由美は満足そうに笑い、要人は否定に必死になる。

近藤を含め男子全員が興味深々で要人に食いつ中、一人ぽかんと口を開けていた青山に、由美がまるでオヤジのように絡み始めた。

「青山早くしないとられちゃうぞ」

「ば、馬鹿なこと言うんじゃねえよ。何でお前にそんなこと」

鼻の頭にあるニキビまで真つ赤にしながら、再びご飯にがつついた青山の様子を見て、由美は面白いモノを発見した子どものようににやりと笑う。

賑やかな、昼の時間がゆつくりと過ぎていた。

放課後の職員室の前に、要人の姿があつた。横には目を輝かせている由美の姿もあり、人通りの多い廊下に、よくある先生を待つ生徒の姿として、溶けこんでいる。

「タニキョーに何の用があるの？」

「山野くんのこと、聞こうと思って」

顎に人差し指を置き、僅かな時間考えた後、なるほどね。と由美は呟いた後、要人に笑いかけた。

「ほんとに要人は山野君にゾッコンだね！」

「声が大きっぱ」

背も高ければ、テンションも常に高い。

おまけに声が常に大きい由美に、要人は慌てて注意する。ふだんならそんなに気にはしないのだが、意識しなくても神経質になってしまう理由が、今はあった。

「ごめんごめん。しかしさ、何でそんなに山野にこだわるかね」
「べ、別に拘ってるわけじゃないって言ってるじゃん」

慌てて取り繕う要人に由美は思い切り怪しんでいる視線を送る。

しかしそれ以上は聞いてこなかった。

やまのつとむ

山野勉というクラスで一度も顔も見たことない男子の名前を見つけたのは、今朝グラフに貰ったあの善行リストの上だ。

当初、というか現在進行形で神の子ということに自覚も納得もしてない要人だが、山野の名前に気づいてから、妙に気になってしまっ
って仕方がないのだ。

だからと言って今日の昼の時のように、いらぬ誤解を生みたくはないし、何より自分が神の子になってしまったという事実を、隠す必要があるので少しでも他人との接触を避けたかった。

神の子は一般的には知られておらず、世間に公にされている神の子は神の子の中でも、特に実力者だったりするらしい。神の子を利用しようとする人や、命を狙う集団もいるらしく、神の子の存在は極秘事項らしい。

さらに国が存在を察知して保護している神の子も、全員ではないらしいのだ。

これは全てグラフからの情報なのだが、要人もむやみに周りに迷惑かけたり、危険に晒すわけにもいかないので、なんとか最短で山野の情報を聞き出す必要があった。

少し警戒しすぎかもしれないが、最初は慎重すぎるほうがいいだろう。と今日の昼の反省を踏まえて、改めてそう考えたのだ。

しかしいつも昼ご飯と一緒に食べた由美は確実に、何か感づいたのだろう。いつも授業が終わって、部活に直行する彼女が、要人が職員室に行くと告げるところに着いてきてしまったのだから。

「着いてこないでも良いのに」

「なんだか面白そうな臭いがしたの。ふふ、私のカンは鋭いのよ」
瞳を輝かせる由美は野生のカンというか、そういうものが鋭いと
これまで付き合ってきた中で、要人も気づいていた。

運動神経は早くも陸上部の短距離エースを張るくらいの実力だし、
授業で寝ている姿しか見たことのないのに、試験前夜の山カンだけで
試験を受け見事合格点を叩きだしている。

毎日しっかり勉強していても、平均点しか採れない要人とは大違
いだ。

もしかしたら一番気を付けないといけないのは、身近にいるのか
もしれない。と考えたその時、担任の先生が現れた。

「何かあったのか。百田はともかく、三瀬が来るなんて珍しいじゃ
ないか」

「はい、あのクラスの山野君についてちょっと話があるんですけど」
担任の谷垣、略してタニキョーは五十を過ぎている数学の教師で、
面倒くさがりでやる気のない先生なのだが、生徒にはそんなところが
ウケて人気のある先生だ。

「山野……ああ、あいつか。そうか、あいつのことが知りたいんだ
な」

「はい、お願いします」

「ちょっと待ってる」

そう言って、谷垣は職員室に引っ込むと、すぐに戻ってきた。そ
の手には、大きめの茶封筒が握られていた。

「ほら。これ、山野の家に届けてこい」

押しつけられるように、茶封筒を受けた要人は唖然として、茶
封筒と先生を交互に見る。谷垣はニヤリと笑って、要人の肩を叩く。
「あいつ入学式以来学校来てないんだ。俺だって詳しくはわからね
えよ。知りたいなら、本人にあってこい。ついでにそいつも届けと
いてくれ」

「先生、私そんなつもりじゃ」

「じゃあ頼んだぞ。あと百田、お前昨日の宿題出してなかったな。放課後に課題追加するから取りに來い」

「ええーうそお！」

わははは。と嬉しそうに笑いながら、谷垣はいなくなりその場には、明らかに余計な用事を押しつけられた要人と、カンとやらが外れて涙目の由美が残された。

「……ごめんね。私が職員室に行ったばかりに」

「いいよ。ついて行った私が悪いんだから」

明らかにテンションが下がっている二人は、ぼそぼそと喋りながら、廊下を歩く。

「でもおつかしいな。絶対に面白いことが起こる気がしたのに」

頬を膨らませる由美に、苦笑しながらもため息を吐く。準備良く地図も手渡されていた為に今更断りに行くのも気が引けるし、多分あの先生のことだから、生徒が勝手に職員室に入れないという規則を盾にして、出てこないだろう。

「私、今日の帰りにこれ渡してくるよ。やっぱり気になるし、山野君のこと」

「そっか。じゃあ私も行く」

返ってきた言葉に思わず要人は、へ？ と間の抜けた声を漏らした。

「でも由美部活あるんじゃない」

「いいよ、一日くらい。さぼっちゃえ」

ペロリと舌を出す由美は、にやりと笑っていた。

山野勉の実家は学校からそう離れた場所ではなく、桃城町の隣の山笠町という場所にあった。住宅地の一角にある彼の家は、周りの家と同じごく平凡な大きさの地味な家だった。

「やっと着いた。なんか、思ったより普通だね」

「一体何を期待してたの」

「ほら壁に夜露死苦とか書いてたりしてさ」

呆れながら自転車から降りた要人は、先に並んで家を眺める。くすんだ茶色の壁に、瓦の屋根。小さい庭は、綺麗に整えられていた。玄関前にある呼び鈴を押そうとした由美の腕を、抱きつくようにして要人は押さえる。

「待つて。まだ言うこと決まってるない」

「え、会いたいんじゃないの」

「会いたかったけど、それとこれは別」

目を見開いて、意外そうな顔をする由美に要人は、頬を膨らまして反論する。

「大丈夫大丈夫。本人見たら、言いたいことも勝手に出てくるって」

「ち、ちよつと待つてば。あと五分でいいから」

人の家の前でもみ合っている二人は、後ろから近づいてくる人影に気づけないでいた。

「あの、ウチに用でしょうか」

恐る恐る尋ねてきた声に二人はピタリと動きを止め、何も言えずに顔を見合わせた後、似たような苦し紛れの笑みを浮かべた。

「なるほど、ウチの兄に学校の届けモノですか。わざわざありがとうございます」

「はい。あと、できたらついでに山野君にも会いたいな、なんて――」

ついで。という言葉将由美が口にした途端、要人の肘鉄が由美の脇腹に入り、由美の言葉は途中で途切れる。

「私は構わないですけど、多分兄は出てきませんよ」

「それでも、お願いします。ええと……」

「山野美奈子です。初めまして」
やまのみなこ

「初めまして。美奈子ちゃんは中学生かな。すごくしっかりてるね」
ツインテールの少女は、大きな目を懐疑心に染め上げながら、二人を見るが、要件を告げると納得したのか、さっさと二人の横を通り過ぎた。その途中でぼそりと呟いた。

「私、小学生です」

言われて初めて、少女の背中に背負われた使い古された赤いランドセルに要人に気づいた。

それから数分後、ガチャリと音を立てて現れた美奈子は、数分前と同じ口調同じ雰囲気で、やっぱりあいたくないそうです。と二人に告げた。

要人は肩を落とし、ため息を吐いただけだが、連れてきた由美はそう簡単には手を引こうとしない。腕を組んで、納得いかないという表情で玄関の前に仁王立ちする。

「なによ。カワイイ女子二人も折角家まで来て上げたのに、お礼の一つもなしっておかしいじゃない」

「由美」

「大体ね、学校来ないで毎日何してんだか。ヤンキーなら学校来ながらでも出来るでしょ」

鼻息荒くする由美をなんとか諭そうとする要人だったが、美奈子が俯いて肩を震わせているのに気付कि、顔を青くした。

さすがに実兄をボロクソに言われたら、誰だって怒るだろう。

フォローのしようもなく、おろおろと要人が宙に手を彷徨わせていると、勢いよく美奈子が顔を上げ、由美に飛びかかった。

喧嘩になる。

そう思った要人は目を瞑ったが、事態は思わぬ方へと動き始めた。

「そーですよ！ その通りです！」

由美に抱きついて、美奈子は確かにそう叫んだのだ。要人どころか由美も、あまりにも先ほどのクールな美奈子の変貌ぶりに、押し黙ってしまった。

「美奈子、変じゃなかったんだね。やっぱり兄貴がおかしいよね！ お母さんも先生もみんな兄貴の話したら、暗くなるし話逸らすから、気にしてる私がおかしいのかと思ってたの」

満面の笑みを浮かべる美奈子は、先ほどとは打って変わって、年相応の無邪気な笑顔を浮かべた小学生の顔になっていた。

きつと彼女なりに、気を使っていたのだらう。兄や周りの人に。「お兄さんが学校に行かなくなった理由、知ってたら教えてくれなかな」

「美奈子もよくわからないの。中学校卒業したら、いきなり部屋から出てこなくなっちゃって。ご飯を食べる時くらいしか、顔合わせないし。しかも夜中になったら、どこか行っちゃうんだ」

要人の質問に、美奈子は眉を八の字にして二階に視線を送る。それを追うと、玄関から見て右の隅の部屋の、窓の締め切ったカーテンの奥から、光が漏れていた。

「あそこがお兄さんの部屋？」

「うん。よくわからないけど、夜になるまで、一日中なんかやってる」

三人揃って腕を組んで低く唸る。引きこもってる理由も分らないんじゃない、どうしようもない。

結局解決法も出てこず、二人は今日のところは引き返すことにして、また来ると美奈子に告げて自転車に乗って、山野家に背を向けた。

視界から消えるであろう瞬間に見えた山野勉の部屋は、煌々とした光が漏れだしていた。

やけに長い一日だった。

コンツという小気味良い音を立てながら階段を上り部屋に入ると、とても空腹に効く匂いが部屋中に充満していることに気づいて、ようやくグラフの存在を思い出す。

「お帰りなさいませ。お荷物をお持ちします」

「た、ただいま。大丈夫だよ、ほらすぐそこまでだし」

「いえ。仕事です」

こんな状況、絶対に他の人にはバレるわけにはいかない。特に由美辺りにバレると、きつと彼女は腹を抱えて笑った後、みんなに言いふらしてしまうだろう。

「どうやらリストに載っている人物に、接触したようですね」

結局要人が折れて鞆を渡す時、グラフは囁くように耳元で言った。別に隠していたわけでもないのだが、要人はどきりと心臓が一瞬跳ね身を引く。

「ふふ、隠すことありませんよ。お嬢様は神の子として、当然のこととをしているだけです」

「別に隠してなんかないよ。それに、今日のは先生に頼まれたから行ったわけで、神の子とかそういうのは関係ないし」

ムキになって反抗する要人に、グラフは黙ってほほ笑み。晩御飯の支度が出来ております。と話を変えた。

要人にはなぜ自分が、ここまで神の子という存在や影響を認めたがらないのかはわからない。

ただ、今日「山野勉」という文字を読んだ時、胸に抱いた感情や、彼の家を訪問するまで要人の背中を押し続けた衝動は、確かに今までに感じたことのないモノだった。

それ故に、要人は不安だった。

昨日今日に神の子になっただけでこんな感情が生まれてしまったのだ。これから自分は自分でなくなるのではないか。とか考えるだけで、とてつもなく不安な感情に身を捉われてしまう。

「お嬢様、いつまでそこにおられるのですか」

グラフの声に、はっと顔を上げた要人はようやくまだ靴すら脱いでいないことに気が付き、慌てて脱いで中に入ってしまった。

畳の上に座り居心地が悪そうにきよきよと、視線をあちこちに彷徨わせる要人に、台所から料理を持ってきたグラフは、首を傾げる。

「お嬢様、何かおありですか」

「今更かもしれないけど、そのお嬢様って言うのはやめてくれないかな。呼び捨てでも構わないし」

「しかし私はお嬢様の使用人でございますので」

「それにしてはたまに態度が大きいような」

ぼそりと皮肉った要人に、ほほ笑んだままグラフが顔を向け、思わず要人はそっぽを向く。確実に聞こえていたようだ。

「あと、この豪華なご飯はどうしたの」

要人は狭い机に並べられる色とりどり、しかもどれも高そうな料理の品々を指さし、グラフに尋ねる。

「私が作らせていただきました。お口にあればよいのですが」

お口に合うものなにも、要人に嫌いなものなどこの世に一つもない。それを除いても、真っ白いテーブルクロスの上にある、高級な食器の上にある料理はどれも、要人が生で拝見したことないくらい、美味しそうなものだ。

しかし、貧乏性の要人が気にしたのは、そんなところではなかった。

「この材料のお金どこから出てきたの」

食器の類はグラフ持参だと説明できなくもないが、さすがに食材はそうはいかないだろう。この一食の為に、どのくらいの食材が使用されているのか、またその総額など、要人は考えたくもない。

当のグラフはにこにこしているだけで、全くもって話すつもりはないようだ。

思い通りにいかないことと、相変わらずの居心地の悪さに肩身の狭さに、内心ため息を吐きながら要人は、美味な夕飯を一人で食べ始めた。

「ご飯が半分くらい要人の腹の中に消えた時、横に控えていたグラフがふいに口を開く。

「山野勉という少年、どうやらヤンチャな方らしいですね」

「どうやら全部お見通しだったらしい、要人は食べるを止めて横を向いた。

「知ってたんだ。私が山野君に会いに行ったこと」

「ええ、先ほども言った通り隠さずとも良いんです。何より、お嬢様の神の子としての最初の善行。私も全力でサポート致します」

要人の心が、僅かに陰る。

「少年はどうやらガラの悪い少年たちと、夜な夜な会っているようですし、一緒に色々やっているようですよ。たださすがに昼間に、引きこもっている理由まではわかりませんが」

よくそこまで調べたものだ。半日も時間はなかったはずだ。要人は胸の内に発生した黒い感情を押し殺し、視線を膝に落とす。

「教えてくれてありがとう。でもそういうのは今後やめてくれるかな」

「何故です。私はお嬢様の神の子としての……」

「私は、別に良いことをしたくてやってるわけじゃない。もう山野君には会いに行かないし、もう関係ないよ」

出来るだけ、感情を露わにせず淡々と言い切った要人だったが、声は僅かに震え、内に黒いものも増幅するばかりだ。

「わかりました。ご飯は冷めてしまえます、どうぞお食べ下さい」
「気まずい静寂の後、グラフはあっさりと会話を打ち切った。そして、俯いたまま黙っている要人に、もう一言だけ付けくわえる。

「ですがお嬢様は、真正正銘神の子です。きっと、明日明後日いつになるかはわかりませんが、少年の元を訪れていますよ」

嫌な悪寒が、背中を伝って要人は怯えるように目を瞑った。

The first happiness 5

あれから数日経ったある日、要人は再び山野勉の家を訪れていた。何度か我慢したのだが、初めて感じる強い衝動は日に日にその力を増していき、これ以上押し殺すことが出来なくなったのだ。

手の中には、再び谷垣からもらった茶色の大きな封筒を携えている。

呼び鈴を鳴らししばらく待つと、扉を開けて山野勉の妹の美奈子、ひよいと顔を出した。二つに結んだ髪が揺れ、大きな瞳が、不思議そうに要人を見上げている。

「あれ、確か前も来た……」

「三瀬要人です、よろしくね。これ先生が渡してだつて」

「ありがとう。でもこれ意味ないと思う」

裸足で玄関から出てきて、茶封筒を受け取ると、美奈子は少し残念そうにトーンを落とす。

「何かあつたの？」

「兄貴学校辞めるんだつてさ。それで親と大喧嘩してから出て行って、もう三日は帰ってきてない」

腰に手をあて、ため息を吐く美奈子が言った衝撃的な言葉に、要人は驚きのあまり声も出なくなる。

しかし、改めて考えてみると、出席日数も崖っぷちかもう落下している現状だし、留年も考えると確かに辞めるという選択肢も、出てくるのは自然なことだ。

でも彼の選択が、正しいことだとは要人は思えなかった。山野勉本人にあつたわけでもないし、噂以上の彼を、知っているわけでもない。

理由を聞かれるときつと、答えることは出来ないだろう。

「山野君がいそうな場所つてわかるかな」

「わかってたら、とつくに探しに行ってるよ」

少しむくれた表情を作る美奈子に、要人はそうだね、ごめん。と謝り、背を向けた。

「じゃあまたね」

「ちよつと待つて。あのさ、また今度来てよ。兄貴もいるかもしれないし、その時は会ってくれるかもしれないしさ」

要人は振り向き、小さく頷いて、山野宅を後にした。自転車に乗り、坂を下っていく。その行先は、自宅のアパートではない。

まだ夜が更けるには時間がある。要人は決意と微かな焦燥感を胸に、ペダルを強く踏み出した。

山野勉の情報は僅かだが有益な情報を握っていた。由美の余計なひと言のおかげで、勘違いした男子連中や、由美本人から、嫌でも山野勉の中学校の悪行云々を聞かされたからだ。

大半はあいつが誰々を殴った。とか、先生と喧嘩した。という役に立たないモノだったのだが、その中でも、幾つか有益な情報を知ること出来た。

自宅から大体三十分辺りで、学校からは一時間半くらいのところにある桃山町の商店街で、彼はよくたむろしていたというものだ。

要人は商店街の入り口にある「桃色通り」と、書かれてある所々錆びた大きな看板を見上げながら、少しだけ乱れた息を整えた。

近所に大型スーパーが出来てから、この商店街はめっきり人が減ったらしく、午後八時現在にもなると、ほとんど人通りはなく、レング造りの車道と歩道を挟むようにして、並んでいる店のシャッターもほぼ閉まっており、等間隔にある外灯が物悲しく通りを照らしている。

要人は自転車から降りて、辺りを見回しながら歩道を歩く。

大体通りの半分くらいまで来た時だろうか。

半ばあきらめ気味で自転車を押していた時、自動車の音に混ざっ

て、途切れ途切れにギターの音色が聞こえ始めたに気づき、要人は歩を止めた。

耳を澄ますと、どうやらそんなに離れていない場所に、音源はあるらしく無意識のうちに、要人はたどたどしい音色を追いつめる。

そして、例のごとくシャッターの下りた文具店と衣料店の間にある細い路地に、その音の正体を見つけた。

通りから漏れる光と大きな懐中電灯を頼りに、譜面を見つめ、汚れた壁にもたれかかりながら、不慣れそうに抱えたギターで、コードを追う少年の姿があった。

まだこちらに気づいていないのだろう。

路地をのぞきこむような格好の要人では、灰色のパーカーを着て、フードを被っている少年の表情は見えない。

この少年なら、もしかしたら山野勉を知っているかもしれない。

そう考え、要人は店の角から路地へと一歩踏み出す。

背後の外灯に、照らされた要人の影が譜面まで伸び、少年ははつと顔を上げた。

しかしこちらを見ている少女が、自分の知らない者だと気付くと、興味なさそうにまた譜面に視線を落とした。

「あの。聞きたいことがあるんですけど」

少年の方へ歩き出しながら、要人は口を開いた。しかし少年は無視したまま、ギターの弦を弾いただけで、顔を上げない。

「聞こえてますか！」

本気で聞こえないのかと思って、要人は小走して一気に少年との距離を縮め、少年の耳元で叫ぶ。すると少年は、コードを間違えたのかビーンと妙な音を出した後、舌打ちして要人を睨んだ。

「何だよ、うるせえな」

「ちよっとお尋ねしてもいいですか」

少年の鋭い眼力は中々の迫力なのだが、要人は動じずに微かに笑

う。要人の様子に、少年は再び舌打ちして、返事変わりにギターを胡坐をかいている足の上に置いた。

「山野勉っていう子知りませんか。探してるんです」

「山野お？ あいつに用でもあるのかよ」

「あるから探してるんですよ」

ふーん。と言って、少年はじろじろと半分腰を折って、少年を覗きこんでいる要人の容姿を見る。その後、がっかりしたように肩を竦め、手を離れたばかりのギターを再び抱えこんだ。

「あいつなら、この通りから外れたとこの公園にいるぜ。でも超危ないやつだから、気をつけろよ。でもまあお前なら、襲われる心配もないか」

グラフに続き、ものすごく失礼なことを言われた気もしたが、要人は深く考えないようにし、ありがとうと頭を下げる。半分少年に背を向けたところでピタリと止まり、要人はもう一度少年に向き合い口を開く。

「もう時間遅いから、気を付けた方がいいかもしれませんよ。色々物騒だし」

くるりと振り向き、要人は軽い口調で忠告し要人は小走りで行って行った。

残された少年は、若干驚いたように目を開いて要人の背中を見つめていたが、やがてまたコードを追いかける。

地面に転がった彼の譜面に、複数の影が差すのはそれから数十分後のことだった。

おかしい。

息を切らしながら、要人は頬を伝う汗を手で拭う。この辺りをぐるぐる回ったが、山野勉どころか、公園すら見当たらない。

三十分程度の時間しか経っていないが、もともと商店街はそんなに長くないし、その周辺だったかかしれている。

もう三周くらいしたのだがどこもかしこも、うつすらと排気ガス

の煤で汚れた家ばかりで、公園のある気配すらないのだ。

もしかして騙されたのか。

要人がようやく悟ったのは、さら十分後のことだ。なんたって、もう探しつくしたのだから、いくらなんでもおかしいだろう。

腹の立つた要人は、自転車のペダルを叩きつけるように踏みつけ、もう一度商店街のあの少年の元に戻って行った。

要人が異変に気付いたのは、文具店の落書きされたシャッターが視界に入った時だった。

ギターの音は聞こえず、代わりに怒鳴り声のようなものが聞こえてくる。慌てて要人が自転車から降り、路地の入口に立つとそこには、三人の男達が例の嘘付き少年を取り囲んでいる。

彼らの周りには懐中電灯や、ぼろぼろに破かれた譜面が散乱し、少年の唇は切れて血が出ていた。

三人の男は、だばだばの服を着ていて髪を染め、ピアスもしているが年齢はそう要人と変わりはないさそうだったが、ガタイは良くいかにも不良といった男子だ。

対する少年も、三人相手でもまったく引けを取っておらず、胸倉掴まれて壁に押し付けられているにも関わらず、余裕の表情を浮かべている。

あまりの急展開についていけず、要人が立ちつくしていると三人のうちの一人が、要人に気が付き慌てたように声を上げた。

「おい、誰か見てるぞ」

「マジかよ。おい、山野お前応援呼んだのか」

残りの二人は慌てるが、メガネをかけて散々自転車を漕いで乱れた髪の毛で、突っ立っている背の小さな少女の姿を確認すると、拍子抜けしたように軽い笑い声を上げた。

余裕の表情を浮かべていた少年も、面倒くさそうな表情を要人の再登場に対して浮かべる。

「おいおい山野お、あれお前の女か。しけた奴だな」

「ちげえよ。知らねえ奴だ」

にやにやしなから顔を突き合わせ、嫌みたらしく言う男に少年は、吐き捨てるように言った言葉を、要人は聞き逃さなかった。

「えつ。山野って……」

「これは見せもんじゃねえんだよ。さつさとお家に帰れ」

三人のうちの一人が肩で風を切りながら、こっちに近づいてくる。
「それとも俺らと遊ぶ？　でも残念だけど、俺らかわいい娘としか遊ばないんだよね」

にやにやと笑う男に対し、要人は無表情のまま身じろぎもせず、その場に突っ立ったままだ。

「早くどつかいけって言うてんだろうが！」

要人はすうつと静かに、かつ深く息を吸うと一気に吐き出し、大声で叫んだ。

「いやああああ！　襲われる！　誰か来て！」

男達は一瞬ひるんだが、すぐに状況を理解したのだろう。

馬鹿だのクソだのと吐き捨てながら、その場から逃げだし、路地から出ていく。

その際に思い切り要人は突き飛ばされ、路地の汚れた壁に腰をぶつけて、しゃがみこんだ。

「痛いなあ。ほんと最悪」

「何しに来たんだよ」

腰をさすりながら愚痴る要人を、いつの間にか近寄っていた少年が、威圧感たつぷりに見下ろしている。

「決まってるさ。山野君に会いに来たんだよ」

三瀬要人の神の子としての初めての相手は、細く剃りこみの入った眉を、ほんの僅かに下げて困ったように頭を掻いていた。

「君が山野君だったんだ」

「……」

要人と山野勉はしばらく無言で走っていたが、商店街を抜けた辺りで歩を緩め、要人は山野に話を振った。

「ていうか何で嘘ついたの」

「お前がうざいからだ」

口調からも相当腹が立っていたのだろう。唾を吐き捨て、山野は前髪を掻き上げ、要人を睨みつけた。

フードを降ろし、露わになった素顔は、短く切っている赤い茶色の髪の毛と、鋭い目じりと三白眼も合わさって、とても同じ年齢の学生とは思えないほどの迫力がある。

そんな根っからの不良に睨まれて、普通の人なら怯んで、逃げ出すこともあるかもしれないが、今彼の前にいる少女は、生憎普通の人間ではない。

「初対面の人になんて言い草」

「うるせえ、ほっとけ。お前こそ俺に何か用か」

山野の眼力が通用しないことに、多少動揺しながらも、山野は今まで他者を圧倒してきた威圧感を緩めることなく、自分の胸にも達しない小さな背の少女に尋ねた。

「そうだよ、用があつてきたの。ほら、山野君家出してるんでしょ。まるで今日の天気を告げるかのように、あっさりと言う要人に山野は、まあな。と頷くことしか出来なかった。

家出とは、もっと重々しいものだと思っていたのだ。

「家に行っても会えないし、今がチャンスだと思って」

得意げに、ない胸を張る要人は山野の瞳には、異様なモノのように映り思わず唾を飲み込んだ。

「お前、俺が怖くないのかよ」

「え、何で？」

ただでさえ暗く、お互いの表情が見えずらいのに、顔にかかった巨大な眼鏡のせいで要人の表情は、山野にはほとんどわからない。

それでも、たった今の要人の口調は、心から驚いたものだと感じた。だからこそ、無意識のうちに山野は、心を開き始めた。

「なんでって、そりやお前、さっきの見てなかったのかよ。喧嘩もしてたし、この顔だろ」

「まあ確かに喧嘩してるところは驚いたけど、アコギを一生懸命弾いてるとこ、先に見てたしね。でもなんで家出なんかしたの？ほんとに親と喧嘩したからだけなの？」

舌打ちをし、山野は視線を足元に落とす。

「お前には関係ないだろ」

「いや、関係ある」

突き放したつもりが、逆に自信満々に返ってきた言葉に、山野は思わず落とした視線を上げる。

「だって私、山野君に学校来てほしいしね。クラスメイトだし、関係あるよ」

「ふーん。お前学級委員とか、センサーの命令で俺に会いに来たってことか」

「半分はそうかな。届けモノ持って山野君のウチに押し掛けてたし」

腕を組んで、片眉を上げて少し笑う要人は、とても嘘をついているようには見えない。今まで接したどの人とも違う雰囲気、山野は戸惑う。

その時だった。

「山野お！！」

商店街の奥のほうから、聞きたくない声が飛んできて、山野は面倒臭そうに、要人は嫌そうに顔を歪めた。

先ほど逃げた少年達が仲間を四・五人引き連れ、こちら側に全力

疾走してきている。

喧しい喧騒と足音が商店街にこだまし、あっという間に二人に追いつき、取り囲んだ。

「逃げられると思うなよクソ野郎」

「ビビッて逃げたくせによく言っぜ」

顔をぐいっと近づけ、メンチを切る先ほどもいた髭を生やし、赤い服を着たリーダー格の男を、山野は鼻で笑い飛ばした。

「俺らの場所奪つとして、謝罪の一つもねえお前を逃がすとも思ってんのかよ。ああ？」

場所と言うのは、恐らく彼がギターを弾いていたあの路地のことだろう。要人はなんとなく理解は出来たが、それ以上深くは察することはできない。

「腐った野郎が道に転がってたから、掃除してやつただけだろ。ポランティアだよポランティア」

ヘラヘラと笑う山野の一言は、初めから沸騰間近だった不良少年達の逆鱗に触れた。

「ぶざんけのもいい加減にしろよ！ 後悔させてやるぜ！」

リーダー格の少年が叫ぶと、取り囲んだ少年達は一斉に山野に向かって拳を振り上げた。

山野はにやりと不敵な笑みを浮かべると、最初の一発をリーダー格の少年の顔面に叩き込んだ。長い腕と固そうな拳が、少年の顔にめり込み少年が倒れる。

得意げに笑う山野の頬やコメカミに、三人分の拳が飛び込んできて、確かに山野の顔を捉える。

だが、山野はそれに動じない。

殴った直後の隙のある少年達の内の一人は、リーダー格の少年と同じように拳を叩き込まれ宙を舞い、他の二人は腹部を蹴り飛ばされて、地面を転がった。

たった一瞬の出来事。

その一瞬は、他の敵意ある者達を怯ませるのに、十分な要素を含

んでいた。

「こんなもんかよ。情けねえな」

殴られた際に口の中を切ったのだろう。溜まった血を吐き出しながら、後ずさりする少年達を見やって、挑発する。

負ける気はしなかった。

何発殴られようと、倒れてやるつもりはないし、自分の受けた倍の痛みを返してやるつもりでいたし、実際にそれは達成できただろう。

しかし頭に血の上っている少年達も、彼らよりも一見冷静そうな山野も忘れていたことがあった。

互いに身じろぎもせず、にらみ合っている両者を包む静寂を破ったのは、彼らが完全に蚊帳の外だった若干影の薄い少女だ。

カラカラと自転車を引いて歩いていき、不良少年達の前を通り過ぎると、山野の前でピタリと止まる。

身長差が頭二つ分くらいある山野を見上げる少女、要人にその場にいる全員が驚き、全員分の視線が集まった。

僅かな静寂。その後、要人は自転車のハンドルを山野の体に押し付け、急いで自分は荷台に乗ってバンバンとサドルを叩いた。

「よし、今のうちに逃げよう！」

あまりにも予想外の行動に、山野も後ろにいる少年達も啞然として、立ちすくんでいた。

「お前バカだろ」

「いいから乗って。早く漕いでよ、今がチャンスだって。それにほら、多分この場所で騒いでたら近所迷惑だし」

「わけわかんねえ。あいつらに殴られたくなかったら、一人でどこか行けよ」

イラつく山野は脅すが、要人は頑なに首を横に振る。

「私が殴られるの見たくなかったら、早く自転車に乗って一緒に逃げて」

何故か得意げに鼻を鳴らし、胸を張る要人はくりと後ろを向き、お互いに顔を見合わせている少年達に、舌を出して精一杯挑発した。「ほらほらビビッてんじゃないぞ！　か、かかってこい！」

下手糞な挑発だが、それでも冴えない普通の少女に、しかも山野の知り合いにそんなことを言われて、我慢できる少年達ではなかった。

消えかかっていたテンションに、再び火が点り、ぶっ殺す。だの女でも容赦しないと、物騒な言葉を口にしながら、少年達はこちらに近づいてくる。

「急いで急いで！　捕まっちゃうつてば山野君！」

「逃げんじゃねえぞ！　山野！」

ぎゃあぎゃあと騒ぐ少年達と要人に、先ほどの緊張した空気は台無しになり、やるせない感情に山野は怒りを抑えて、拳を握り締め、そして開いた。

次の瞬間、山野の手のひらの中には要人の手のひらの温度が、ほんのりと残るハンドルを握り締められていた。

全身の体重をかけ踏み込んだペダルは想像以上に軽く、二人分の重みを乗せた自転車はすると前進し始め、油断していたであろう少年達からぐんぐん離れて行く。

「山野！　逃げるなクソ野郎！」

少年達は思い切り走り、精一杯手を伸ばして要人の肩に触れようとするが、後数センチ足りず要人のなびく髪を掠めただけだった。

背後から聞こえる汚い声に耳を貸すことなく、銀色の自転車は彼らから遠ざかり、やがて見えないうところへと去っていったしまった。

「山野の奴、まじで覚えてろよ」

「ていうかあの女誰だよ、見たことねえ」

「あいつさえないなけりや山野の奴フクロにできたのによ！」

近くにある街路樹を蹴飛ばしながら、残された少年達は盛大に愚痴る。

「ぜってー許さねえ。見つけ出してぶっ飛ばしてやる」

最後に手を伸ばした少年が、握り締めた拳を開くと、一本の髪の毛が指と指の間に挟まっていて、忌々しそうに要人のものと思われる髪の毛を、手を払って捨てる。

少年達より若干長い程度の髪の毛は、風に乗り闇に溶けていく。

その先に、自分達に近づいてくるモノを見つけ、少年は無言で目を凝らした。そして、息を呑み後ずさりし、短い悲鳴を上げた。

他の少年も、音も立てずに近づいてくる異形のモノに気がつき、目を見開いた。

「な、なんだよあれ」

「知るわけねえだろ！」

先ほどまでの威勢はとうになくなり、少年達はうろたえて周りに助けを求めるが、当然いるはずもなく少年達は、堪らず逃げ出そうとし、また短い悲鳴を上げた。

体が動かないのだ。

体中の間接が、筋肉が、ありとあらゆる部分が萎縮してしまったかのように、固まってしまつて動かない。

いつの間にか言葉も出なくなり、唯一眼球のみが、彼ら自身の制御圏内にある。

定まらず、ぶれる視界の中で、少年らは悪夢を見る。

暗闇の中を滑るように近づいてきていたそれは、明らかに彼らを狙い、害を与えようとしてた。逃げると本能が警告を鳴らす、それすらも無力で、荒い息だけが彼らを包み込んでいる。

もう『ソレ』の吐息がかかるくらいの距離に近づかれた時、少年らの耳に囁くような声が聞こえた。

「……ユルサナイ」

意味の分からない呪詛を最後に、少年達の意識は外の闇よりもっと暗い所へ落ち、体はその場に崩れ落ちてしまった。

八人の倒れた少年達に興味がなくなったのか、『ソレ』は要人と山野が去った道をじっと見つめていた後、溶けるようにしていなく

なる。

そこには、意識をなくして倒れている少年達のみが残される。午後十一時の、騒がしい夜の終りを告げるように、カラスが一羽、物陰から空へと羽ばたき消えていった。

The first happiness 7

午後十二時を軽く回った時刻。一般的で、健全な高校生が徘徊するには、少々遅すぎる時間になっている。

要人と山野勉は、自転車を二人乗りして海岸通りを走っていた。

山野がどこに行こうとしているのか、何を考えているのかは要人にはわからない。だからこそ、それを尋ねる必要があった。

「どこ行くの？ 山野君の家ってこつちじゃないよね」

「お前こそこれからどうすんだよ」

「私？ 私はこれから家に帰って、それから寝るだけだね。明日学校だし」

暢気に笑う声が背中の方から聞こえ、山野はその無責任な発言にイラつき、思わず声を荒げた。

「お前ほんとバカだよな。全部ぶち壊してくれやがって、それで終わったらさっさと帰んのかよ」

「ぶち壊したって？」

不思議そうな要人に、山野は喉まで出かけた言葉を何とか飲み込んだ。

俯いたまま、黙り込んだ山野は、次から次へと思い浮かぶ言葉を押さえ込むことが出来ず、ついに口を開いた。

「全部だよ、全部！ 俺の居場所も、俺のプライドも、俺の日常も、フラッとやってきたお前が全部ぶち壊しやがったんだ」

前を向いて吼える山野の形相は、まるで狼そのものののだが、彼の表情を見る術のない要人は、後ろで首を傾げただけだった。

「でも、不満だったんでしょ。誰かに助けて貰いたかったんでしょ」

「バ、バカいうな！ お前いきなり何言って……」

「危ない！ 前見て」

相変わらず暢気な口調で、要人が放った言葉は不意打ちに近い形で、山野の胸を射抜き、焦った山野は思わず後ろを振り向き、弁明しようとするが、それがいけなかった。

振り向いた瞬間に、大きくバランスを崩し、自転車は左右に大きく振られ、ついに思い切り整備されたアスファルトの国道から外れ、脇にある草むらに突っ込んでしまったのだ。

うわぁ。

という間拔けな声を上げたのは要人で、山野は肩口から地面に落ちたが、声は上げなかった。

宙を舞った時も、落下し地面とぶつかった瞬間も、要人の言葉でいっぱい頭には痛みさえ入る余地はなく、ただ倒れ地面を見ていた。

「痛い。今日はついてなさすぎる……山野くん大丈夫？」

隣で頭から突っ込んだ要人がゆっくり起き上がり、山野に声をかけるが返事がない。慌てた要人は山野の肩を揺さぶり、何度も山野の名前を呼ぶ。

やがて山野も起き上がり、要人に背を向け座り込んだ。要人は一安心し、安堵の息を吐く。

「俺がいつ不満だって言った」

ポツリと山野が呟く。ハイになっていた彼とも初めて会ったときのような、ぶっきらぼうな様子とも違う声色だった。

「だってさ。めっちゃめっちゃ辛気臭い顔してたし、それにイライラしてたし。だからかな、山野君はなんとなく家出してたり学校に行っていない現状に、不満なのかなって思った」

さすがに『リスト』の事は教えるわけにはいかないので、出会ってから山野の印象について、正直に答えた。

その答えに胡坐をかき、広い背中を丸めて座り込む山野は目を見開く。

「色々聞いてたんだ山野君のこと。中学時代ヤンチャしてたとか、そんな話ばかりだったけど」

どうしてなのだろう。

背中の方こうで語る今日初めて会ったばかりの女子のことを、山野はなにも知らない。知る必要もなかった。

勝手に人の居場所に乗り込んで、勝手に壊して、むちゃくちゃにする。言っていることも、山野を振り回す行動も、腹が立ってしょうがない。

なのにどうして、この人の語る言葉は、悩みの核心をついてくるのだろうか。

唇を噛んで、山野は空を見上げた。

昨日も一昨日も、同じ空の下で下手くそなギターを弾いていたはずなのに、今初めて気づいた。空に浮かぶ月が、あまりにも白いことを。

「学校つてよ、何が面白いんだろうな」

前置きもなく、山野がポツリと呟いた。

「毎日決まった時間に教室行つて、かつたるい授業聞いて、どうでもいい話聞かされて、それでさっさと家に帰る。全然面白くねーじゃん」

「だから学校行かないの？」

「……理由の一つだ」

間髪入れずに言葉を挟んできた要人に、山野は組んだ脚の上に頬杖組んで、鼻を鳴らす。

「興味もないことやるくらいなら、好きなことやってた方が有意義だろ」

「だからギター弾いてたんだ」

「下手で悪かったな」

「そんなこと言つてないよ」

少し赤面しながら言う山野に、要人は頬に付いた汚れを落としながら、あっさりと言葉を返す。そしてごく当然のこのように、それに続けた。

「面白いことねえ、色々あるよ。先生の鼻毛が伸びてるの日々観察したりだとか、購買のパンを何買おうかって迷うときとか楽しいけど」

山野は耳を疑った。

「今日みたくスリリングな夜も中々刺激的だけど、やっぱり私は向いてないや。山野君にはヌルいかもしれないけど」

そう言って要人は軽く笑う。

「山野君は中学校時代どんなだったの。色々噂を聞いてるけど、やっぱり本人から聞いた方が臨場感あるしさ」

「どんなってお前、そりや毎日毎日さつきみたいな奴らと、喧嘩ばかりで殺伐として……」

「楽しかった？」

「まあな」

「よかった。じゃあ学校も楽しめるよ」

どうも会話が成り立っていないような気がする。イラつきから、背中を向けているのが億劫になり、向き合おうと山野がピクリと背中を動かした時、目の前に巨大な眼鏡が現れる。

表情は全く読めないが、なんとなく嬉しそうに笑っているように思えた。

「だって学校でも喧嘩できるし、ギターも弾けるじゃん」

ポカンと山野は、口を開けたまま言葉を失くす。

「ほらウチの学校って何の特徴もないけど、人数だけは多いじゃない。だから喧嘩を買ってくれる不良もいっぱいいるし、ギターだって教えてくれる人も絶対いるよ」

人差し指を空に向かって立てる要人は、山野の瞳には今まで出会った、どの人とも違うように映った。行動に脈絡がなくて、予想もできなくて、何を考えているのかわからない変な人間。

それが、三瀬要人という今日まで一度も顔を会わせたことのない、人間だった。

不安だった。

このいつ鏡を覗いても、こちら側を睨みつけて他人を、自らの家族さえも遠ざけるその表情が。

中学時代の荒れた生活も、自分の顔も嫌いではなかった。むしろ好きな自分も、かつてはどこかにいた。

だが一片の不安は、中学を卒業し、一人でいるうちに増大し大きな壁として、山野の前に立ちはだかったのだ。

髪を染めて、メガネをかけてみたらどうだろう。

一人称を「僕」にしてみてもどうだろう。

考えて、考えて、そしてその度にちっぽけな悩みは大きくなり、代わりに出るため息は増え、解決策も幼稚で単純なものばかり。

こんなこと、例えば家族であっても打ち明けられない。恥ずかしいとか、情けないとかもあるが、何よりも格好が悪いじゃないか。

そうしているうちに、山野はどうでもよかったはずの不安から、目を逸らした。スタートラインから外れた。それでいいと、自分に言い聞かせた。

でも少しだけ、ほんの少しだけだが、目の前の少女の存在が、最初の一步を踏み出せず、その場に立ち尽くしていた山野の視線を前に向かせる。

「お前さ、俺のことどう思う？ 色んなヤツから色んなこと聞いたんだろ。俺の顔見て、喧嘩も見てそれで、どう思う？」

酷く情けない質問だ。

いつもなら笑い飛ばして、こんな女子の言葉に耳を貸すこともしなかっただろう。なのに今、根っこからの不良少年は冴えない少女に、真剣な顔を向けていた。

「すごい睨みつけてくる。口調と声が怖くて、なんだか脅されるみたい。ギターがあんまり上手くない。喧嘩は強そう」

要人は指折り数えて、その一言一言に山野の気持ちは沈むが、要人は最後に付け加える。

「でもそんなの関係ない。山野君は、山野君でしょ」

「……そうだな」

唇を噛み、ゆっくりと息を吐き出しながら、山野は少し表情を崩す。

その一言をずっと待っていた。ような気がした。

自分は自分。他人の評価なんて、気にしない。そんなことを完璧に出来る人間なんてきつとしない。

でも、同じ言葉でも自分に言い聞かせるのと、他の人に言ってもらうのでは、重みが違うものもあるのだ。

「ほら、もう帰ろう。美奈子ちゃんが心配してたよ」

「ああ」

スカートを叩いて汚れを落としながら、立ちあがった要人に続いて立ち上がる。

ずっと隣で倒れていた自転車をようやく助け起こした時、半分無意識のうちに、山野は半歩前で自転車の損傷具合を、チェックしている少女の名前を呼ぶ。

「なあ、三瀬」

「ん？」

「これからよろしく」

反射的によろしくと返し、自転車のタイヤに視線を移した要人は、一呼吸置いた後勢いよく振り返った。

「よろしくってことは、来てくれるんだね！」

「そう言っただろ。まあ別に行かなくてもいいんだけど……」

眼鏡の奥の瞳を輝かせる要人に、照れ隠し気味に頬を掻きそつぽを向く山野だったが、突然差し出された手に戸惑い声を切った。

「じゃあもう一回改めて、よろしくね山野君」

「……ああ」

小さく温かく、そして驚くくらい柔らかい要人の手を握る。

山野勉の最初の一步は、手を引いてもらっての一步だった。その姿は山野らしくなく情けなくて、格好が悪い。

だが、それでも少年は確かに一歩を踏み出した。
小さくて大きな一歩を、踏み出したのだ。

The first happiness 7 (後書き)

一応これで一話が終了です。

中々うまくいかず、つまずきまくって執筆が遅れちゃったのですが、
今後も頑張って更新したいと思います

The opening of the wonder 1

「お嬢様、昨日はご活躍したようで」

満足げな口調で話しかけてきたグラフに、要人は朝食を取るために慣れないフォークやナイフと、格闘するのを止めた。

「活躍って……そういう目的じゃないよ。でも何で、そのこと知ってるのかな」

「私はお嬢様お付きの使用人ですので。当り前でございます」
いつものようにはぐらかすグラフに、軽くため息を吐く。

どのようにして知られたかは、わからないままだが、昨日の行為は『善行』になっていているようだ。胸の奥に渦巻く、安堵とそれに対する微かな抗いに、要人は珍しく戸惑う。

「でもあれは別に『神の子』としてやったわけじゃないし」

「ええ、わかっていますとも」

駄々っ子をなだめる親のような穏やかな目で、グラフはそっぽを向く要人に語りかけた。

「神の子の自覚がまだ乏しい内から、ランクを上げるなんて素晴らしい。さすが私のお嬢様です」

はいはい。と受け流した要人だったが、突如に紙の束をグラフから突き付けられ、要人は思わず座ったまま仰け反る。

嫌な予感がしながら、横を向くと同じ目線にはグラフの笑みがあった。

「新しいリストでございます。どうぞご覧ください」

タウンページ並みの厚さの白い紙に、びっしりと刻まれた名前の一覧。

これだけの情報をどうやって仕入れたのか。個人情報云々は一体大丈夫なのか。考えて眩暈がしそうになり、要人は軽く頭を抱えた。
午前七時の朝の風景。

このとき、要人の『神の子』としての深化が始まっていることに、本人はまだ気づいていなかった。

2

教室に入ると、いつもと違う空気が漂っていて、要人はすぐに足を止めて辺りを見渡した。

するといつも空席の席に、どっかりと座っているクラスメイトの姿を見つけ、要人は嬉しそうに最前列の教卓前のその席に駆け寄った。

「おはよう、山野君。来てくれたんだ。よかったよかった」

「……お前やつぱバカだな」

山野は頼杖を付き、挨拶代わりにため息を吐く。

「なんでさ」

「いや、なんでもねえ」

突然現れた噂の不良生徒の突然の出現に、クラスの皆が凍りついて戸惑っているのに、要人はその中を堂々とやってきて、声をかけてくる。

その態度は、山野を説得した責任とかそういう堅苦しく、半強制的な行動という感じは一切受け取れず、むしろ自分から望んでいるような印象すら受ける。

現状はそんな要人に救われているのだが、どうにも素直になれずそっぽを向いた山野だった。彼にとつての新生活が一カ月遅れでようやくスタートしていた。

どこかきこちなく椅子に座っている山野の姿がイカツイ容姿と真逆でおかしくて、要人は自然に笑みがこぼれる。

しかし突如一瞬だけこめかみ辺りに、針で刺したような痛みが走り顔をしかめた。何の前触れもなく訪れたその痛みは、同じようにしてあつという間に消え去っていった。

片手でこめかみをぐりぐりと押す要人には果たして痛みの正体ど

ころか、本当に痛かったのかどうかも怪しませるくらいの、瞬間的なものだ。

首を傾げ、こめかみを押さえる要人の様子に山野が鬱陶しそうに視線を向けると、要人は慌てて手を離す。

特に変わったところもないし気にしすぎだろう。と自分に言い聞かせ、要人は一人で大きく頷いて見せる。

要人の奇妙な行動にこれまでの経緯で幾分慣れた山野は、目を逸らし小さくため息を吐いた。

そして時間は流れて放課後。

いつものように由美にじゃあねと手を振り、教室を出て学校の裏にある駐輪場に行く。鞆のポケットからオレンジ色のキーケースを取り出し、三つついた鍵のうちの平べったい形のモノを外し、自転車に差し込んで、校内では乗り回してはいけないので校門まで自転車を押して、下り坂の始まりである校門前でサドルに座り込んだ。丘の頂上にあたるこの場所から見下ろす街の景色は格別で、見慣れた街に何重のエフェクトをかけ、要人の前に広がっている。

一度視線をハンドルに落とし、もう一度大好きな景色を見ようと要人は顔を上げた。

その時、要人の世界は変わった。

山野に対する感情と、神の子に対する疑念。自分が徐々に変わっていく不安。

その全てを吹き飛ばすくらいの衝撃で、グラフと出会ったときよりも劇的な世界の変化を無言で示すモノが、視界の先にはあった。

先ほど、たった数秒前まで『それ』はいなかった。街は夕陽に照らされていたし、空には太陽と雲と沿岸にある一番高い煙突から昇る微かな煙しかなかった。

なのになぜだ。

なぜ今、街の大部分は巨大な影に覆われているのだろうか。いや影の正体は考えずともわかった。目の前にその姿を晒してい

るのだから。

だが要人はその姿を信じたくはなかったし、信じれるわけもなかった。

甲羅の上に森を生やした巨大な海亀が空を泳ぎ、陽を遮って街に影を作っている。

言葉にするとそういうことだ。

咄然としたまま、空を見上げている要人を学生たちは早足で追いつ越して行く。彼らは悠々と空を泳ぐあの亀も、亀が作り出す影にも疑問を抱いていていない。

きつと何一つ見えていないのだ。

足が震え視界がぶれる。頭を抱えてその場にしゃがみ込みたくなる衝動に駆られるが、なんとか踏みとどまった。

「ありえないって！」

亀が空を飛ぶなんて、頭がおかしくなったとは思えない。

ペダルを踏み込み、一気に坂を駆け下りる。流れていく景色には目もくれず、空中のただ一点を見つめ要人は目の前の光景を現実か、夢か判断が出来ない要人は叫んだ。

ものすごい勢いでトキワ荘の駐輪場に自転車を乗り捨て、階段を駆け上り要人は自宅の扉をめいっばい開いた。

「おかえりないませ。お嬢様……何かございましたか」

「か、カメ！」

「はい？」

ぜいぜいと息を荒げ、半開きのドアの外を指さし叫ぶ要人。対してグラフは顔に笑みを浮かべたまま、首を傾げた。

「何でカメが空を飛んでるの!？」

「キフネ様ですか。開眼なさったのですか、おめでとうございます。今日は赤飯ですね。お荷物お持ちします」

「あ、ありがとう……じゃなくて! あれってなんなんですか、グ

ラフさんにも見えてるんですか」

取り乱しまくっている要人に対しグラフは嬉しそうに言い、あまりの自然体に要人も流されそうになる。

しかしふと我に返り、グラフに手渡ししかかっていた鞆をもう一度自分の方にやりグラフに質問をぶつける。

「見えてますよ、生まれた時からずっと。驚くことはありません神の子となれば、開眼するのも当たり前のことですし。とにかくお上がり下さい。説明致します」

手を差し出しながら言うグラフに納得いかないながらも、促されるがままに今度は鞆を手渡す。部屋の奥に入る前に、後ろをちらりと振り向く。

亀の腹が半開きのドアの隙間から見え、要人は首を横に振る。その後叩きつけるようにドアを閉めたのは、言うまでもない。

The opening of the wonder 1 (後書き)

更新が遅れてすいませんでした。これからもマイペースに書いていきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0990n/>

GO!GO!神さまチルドレン

2010年10月31日12時55分発行